

異変？

Cover Story

この学校では、晩秋に赤く色づいたカラスウリを数多く目にする事ができるが、今年このウリにちょっとした異変が目についた。茎の一部が節くれ立って異常肥大しているのである。一見できの悪いインゲンのようにも見える。ナイフで切ってみても中には何もいないように見えた。

実はこれは『カラスウリクキフクレフシ』と呼ばれる「虫コブ[*1]」でウリウロコタマ

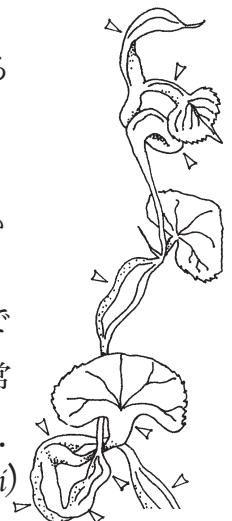
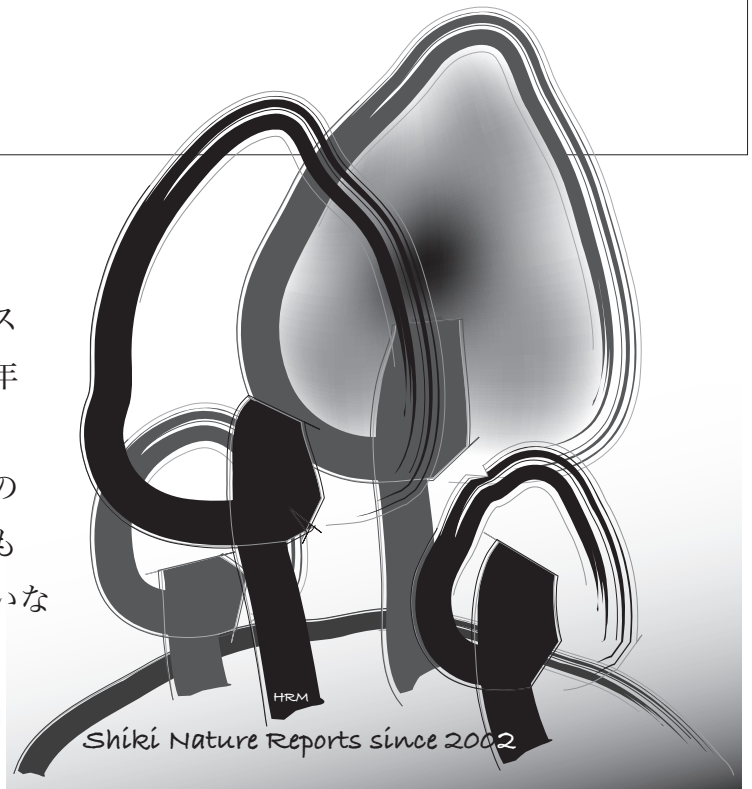
バエというタマバエ科の昆虫の幼虫が中に入り込むことによって形成される。

1つの膨らみに1頭ずつ、長さ数ミリの黄色い糸くずのような幼虫が入っているが、確認のために茎を切っても場所を誤ると「何もいない」ということになる。

*1: 昆虫の寄生によってできる虫コブは、その寄生する昆虫の種類に応じてそれぞれ特徴的な形があるために、分類されて固有の名称がつけられている。なお、虫コブの正しい呼称は『虫えい (insect gall)』という。

例年はそれほど目立たないが、今年のカラスウリについては校内のほぼ全域でその虫コブが確認できた。その原因は不明だが、ウリウロコタマバエ自体は非常にか弱い存在である。だから、虫コブという「隠れ家」が必要なのかもしれない。

(Miyahashi)



四季折々

7月28日の昼前、アオダイショウがアズマモグラを捕食している現場に遭遇しました。近づくとも尻尾の先端をガラガラヘビのように振動させて獲物を盗られないよう威嚇してきました。

秋季 自然観察会

9月19日(土)に、本校周辺に在住の方を対象とした自然観察会を敷地内で行ないます。

カルガモその後

今年のカルガモは14個の卵が放棄されたまま、ヒナが孵ることはありませんでした。観察用のカメラのレンズを嫌ったようです。来年からカメラを撤去します。

2009/6月号の訂正

6月号の巻末「自然観察会 2009 春より…慶應志木の自然は貴重か？」の中で、本校の敷地面積を約18万㎡と記していますがこれは農高発足当時の敷地面積で、現在は「約11万㎡」です。お詫びして訂正いたします(さて…、この差分の「7万㎡」はどこにいったんでしょうね)。

(M)

News

志木の自然[水無月(6月), 文月(7月), 葉月(8月), 長月(9月)]

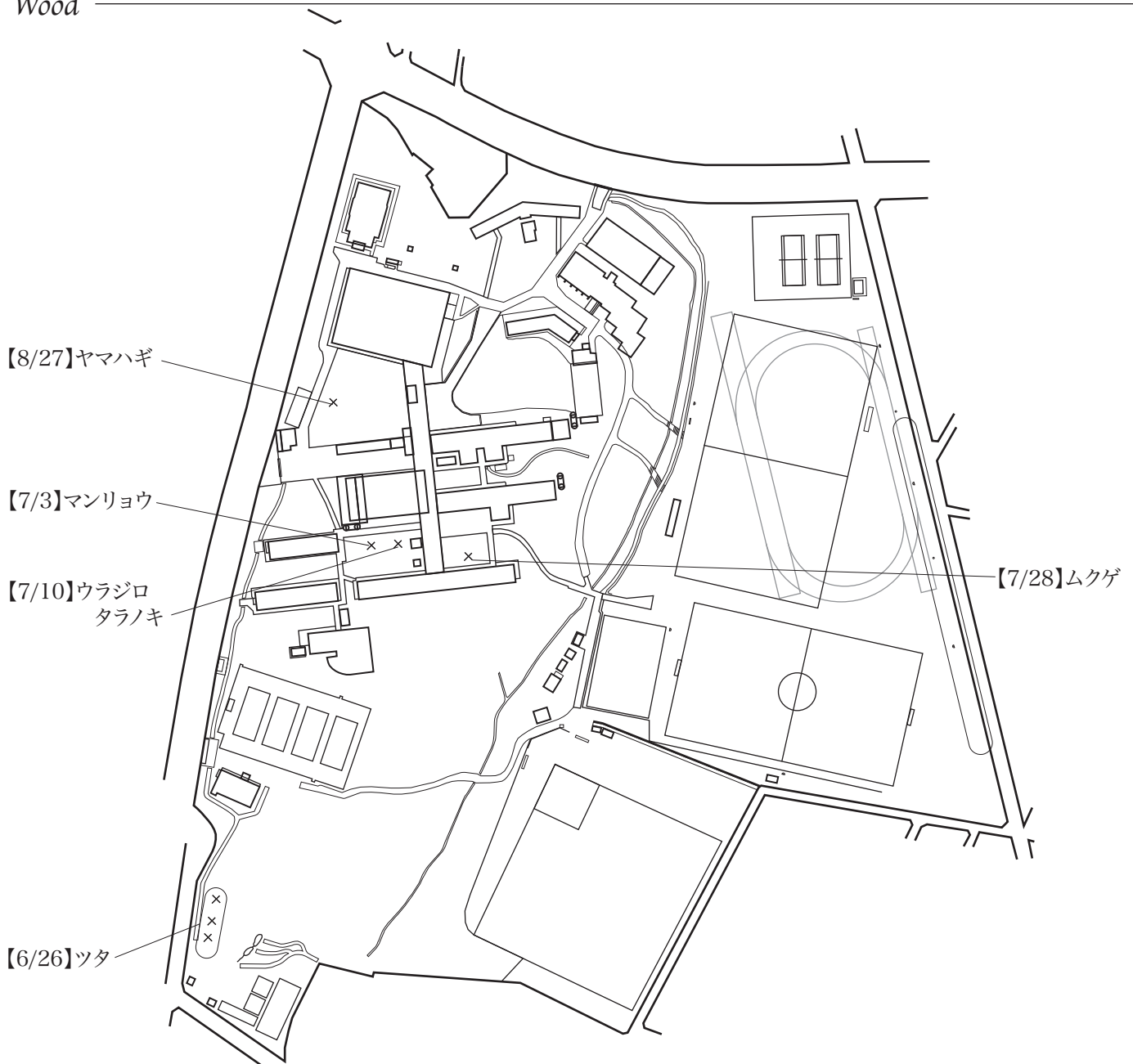
Plants [2009年6月～9月までの開花情報]

「秋の七草」といえば、オミナエシ(女郎花), キキョウ(桔梗), ナデシコ(撫子), フジバカマ(藤袴), クズ(葛), ハギ(萩), ススキ(尾花)だが, 本校で見られるものは後半の3種に限られる. クズの花は校内では目にしたことはないが, (ヤマ)ハギは体育館前の芝生でピンクのきれいな花を咲かせている. ここ数年は外来種の侵入が激しく, 好ましい状況ではないが, オミナエシやキキョウのような在来種なら歓迎である.

Grass

26th Jun. 2009 ヤブラン, ミズヒキ, イシミカワ
9th Jul. 2009 エノコログサ, ミツバ, アキノタムラソウ, ヤブミョウガ
10th Jul. 2009 ミチヤナギ, テッポウユリ, ヒメガマ
19th Jul. 2009 ヘクソカズラ, ヤブカンゾウ, トキリマメ, カラスウリ, キツネノマゴ, ミョウガ, ヤマノイモ, メヒシバ
28th Jul. 2009 ヒメムカシヨモギ, コニシキソウ, ヤマブドウ, ワルナスビ, オオマツヨイグサ, イヌムギ
8th Aug. 2009 チドメグサ, オヒシバ, ナツズイセン, ヤブマオ, キンエノコロ, ヒメムカシヨモギ, ギボウシ, オオマツヨイグサ
18th Aug. 2009 ツルボ, ヒナタイノコヅチ, ノブキ
27th Aug. 2009 イヌホオズキ, ナルコビエ, ギョウジャニンニク, キクイモ, オオブタクサ, メドハギ
5th Sep. 2009 チヂミザサ, ヤブタバコ, イヌハッカ, カナムグラ, モリアザミ

Wood



この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。
名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

(Miyahashi)

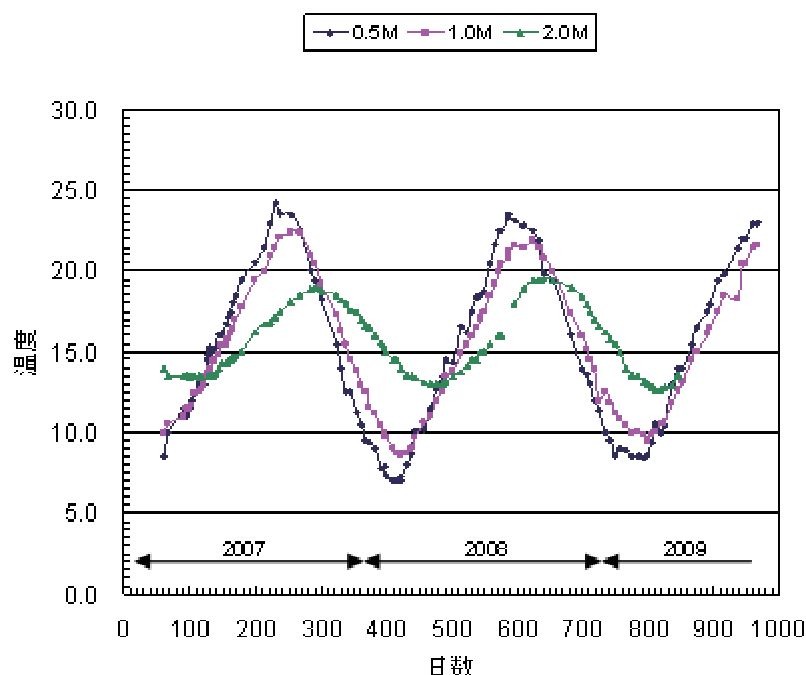
2007 年の 3 月から地下 0.5m、1.0m、2.0m の温度を測定しています。場所はラグビー場・軟式テニスコートの脇に百葉箱がありますが、その近くにある 3 本の奇妙な筒がそうです。筒の長さはそれぞれ 0.5m、1.0m、2.0m で、その中に温度計が入っています。温度計は筒のキャップからチェーンで吊るされています。計測は温度計を引っ張り出して読むだけです。

実はこの 4 月ごろ、温度計を吊るしている 2m のチェーンが切れてしまい、いろいろと手を講じたものの温度計を取り出すことができなくなってしまいました。「もう筒の周りに穴を掘って筒ごと取り出すしかない」ということをたまたまラグビー部の先生にお話ししたところ、ラグビー部員にやってもらえることになりました。

穴掘り当日、奥山君、桜田君、浦野君、勝浦君、山口君、木下君の 6 名を中心に、着々と掘っていきました。はじめは土が軟らかく木の根っこにじゃまされながらも掘り進みましたが、50cm を越えたあたりから、建物の土台の石（以前には馬小屋があったらしい）が出てきました。1m くらいまで掘ると、こんどは土が非常に硬くなってきてスコップ 1 回で 2～3mm しか掘れません。しかも穴を広げないと深く進めないの、下に掘ったり横に掘ったり、いつ終わるのか全く先の見えない状態です。1 日目はおよそ 6 時間掘ってくれましたが、とうとう筒を取り出すことはできませんでした。2 日目、同じ途方もない作業を炎天下の中で行い、その昼過ぎ、ようやく筒を取り出すことができました。穴の深さは 2m、穴の中には人が完全にすっぽり入ってしまいます。合計 9 時間強の穴掘り作業になりました。そして翌日、穴を埋め戻し元の状態に戻してもらいました。

ラグビー部の皆さんありがとうございました。おそらく体力的にも精神的にも君たちでなければ筒を掘り出すことはできなかったと思います。冬の大会に向けて頑張ってください。陰ながら応援しています！

【写真】 穴の底の土をスコップで自分の背丈より上に持ち上げることを想像してほしい。スケールは本稿執筆者。完全に埋まっていることからこの穴の深さがよくわかる。



【下図】 地中温度の記録

深さ 0.5m、1.0m、2.0m の温度 [°C] の変化を示す。横軸の日数は 2007/1/1 を 1 日目とした合計日数で、例えば 500 日目は 2008/5/14 である。季節変化をするが、深いほどその振幅は小さい。深さ 2.0m は 2009 年 4 月中断している。

(Higuchi)

きりぎりすの近くなきけるを詠ませたまうける 花山院
秋深くなりにはけらしなきりぎりす床(ゆか)のあたりにこゑ聞ゆなり

平安朝末期に成立した「千載和歌集」の中の秋の歌。

王朝和歌の世界では、「きりぎりす」はコオロギを指す。百人一首の「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしちに衣かたしき一人かも寝む」(藤原良経)の「きりぎりす」もコオロギである。昼間に草原でギー、チョンと鳴く現在のキリギリスのことではない。

さて、この歌の意味だが「秋もだいぶ深まってきたようだ。寝床のすぐ近くにコオロギの声がしているよ」となる。「床のあたりにこゑ聞ゆなり」は漢詩文の影響下に成立した表現で、「七月野に在り、八月宇(のき)に在り、九月戸に在り、十月蟋蟀(しっしゅつ=コオロギ)我が牀下(ゆかした)に入る」(詩経・国風)に拠っている。コオロギは現在の八月から十一月ころまでを鳴き継ぐが、秋の深まりとともに徐々に人との距離を縮める。野で鳴いていた虫たちも寒さが募れば人家に近く、寝床のすぐそばまでやってくるという。

この世の秋はまた人間の生命の消長を思わせる。鳴き弱るコオロギは身に近い存在であった。秋かけて虫の声の変化に耳を傾けた古の人々の生活が思われる。

(Hayami)

ビオトープ便り ～ザリガニから翡翠(かわせみ)～

Biotope

梅雨明けもはっきりせず、インフルエンザ騒動もあったせいか、今年の夏は短かったですね。私が気づいたこの夏の校内の出来事を2つお話しします。

まず1つは残念なこと。前回お話した、アメリカザリガニにより壊滅状態のミナミ池ですが、ビオトープとして再生すべく水を抜き、植栽、魚、ザリガニ全て取り除き、2週間空にしてから8月にまた水を入れました。そして先日、久しぶりに見に行くと、池底を走る黒い影が多数。な、なんと、子ザリガニがたくさんいるじゃないですか。ただ呆然と立ちつくすしかありませんでした。一度、棲みついてしまったザリガニを駆逐するのは至難の業ですね。これからは別の方法を考えていこうと自分を励ます今日この頃です。

もう1つは嬉しいこと。翡翠をカモ池で目撃しました。ちょうどインフルエンザによる学校閉鎖中でした。志木高始まって以来、こんな人気のない静まり返った学校はなかったでしょう。夕方近く、妙な鳥が池の淵に留まっているなと思いきや、水面に沿って滑るように飛翔した瞬間、確信しました。青い背中と明るい茶のお腹、体を扁平にして飛ぶ先端には真直ぐに伸びたくちばし。一瞬のことで写真にも収められなかったのですが、間違いなく翡翠だと思います。インフルエンザが幸いして、人の気配がなければ志木高でも翡翠が来るんだということがわかりました。ビオトープづくりを始めた当初の目標がこの「翡翠が来る水辺」でしたのでとても嬉しい瞬間でした。

これを励みにまたザリガニと戦いつつより多くの生き物が集まるビオトープを皆で造っていこうではありませんか。

(Izawa)

執筆・担当区分	動物・環境	井澤 智浩 (Izawa)
	鳥類・植物	速水 淳子 (Hayami)
	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)